

『新生』から『夜明け前』へ (2)

De “Shinsei” à “Yoakemahe”

—— sur les oeuvres de SHIMAZAKI Touson ——

佐々木 涇
SASAKI Thoru

1-3-(3)

第二次世界大戦下の一時期をリモージュで過ごした岸本は自然の中であって、姪とのことを「柔かな心」で臨むことができた。そしてこの地に住む子供達との接触をも生む余裕が生じた。それはまた過去をさらに見つめさせることにもなる。これまででは避けるかのようにして、過去への思いを振り払っていたが、ここに至って思いを寄せる。

「飾りとても無い部屋で、唯一つある窓のところへ行けば朝晩の露に濡れる葡萄の葉が見られ、寝臺の置いてある部屋の隅へ行けば枕頭に掛る黒い木製の十字架が見られ暖爐の前に行けば幼い基督を抱いた聖母の畫像が羅馬舊教の國らしく壁の上を飾つて居るぐらゐに過ぎなかつた。しかし彼はその部屋に居る心移して、あの澁み果てた生活から身を起して來た東京淺草の以前の書齋の方へ直ぐに自分を持つて行つて考へることも出來た。あの冷い壁を見つめたぎり、身動きすることも、家のものと口を利くことも、二階から降りることすらも厭はしく思ふやうに成つた七年の生活の終りの方へ。あの光と、熱と、夢のない眠より外に願はしいことも無くなつてしまつたやうな懷疑の底の方へ。あの深夜に獨り床上に坐して苦痛を苦痛と感ずる時こそ麻痺して自ら知らざる状態にあるよりはより多く生くる時であると考えたやうな自分の身のどんづまりの方へ。あの『生の氷』に譬へて見た際涯の無い寂寞の世界の方へ。あの極度の疲労の方へ。あの眼の眩むやうな生きながらの地獄の方へ。あの不幸な姪と一緒に墮ちて行つた畜

生の道の方へ——」(註1)

もちろん、姪とのことは岸本の頭から常に離れはしなかつたであろうが、作者藤村はここに過去への思いを小説の中の一節として書いたのである。いよいよ自省の佳境に入るのであるが、一方で強い願望が心の奥底に潜んでいて、姿を現わす。

「不思議な幻覺が來た。その幻覺は佛蘭西の田舎家に見る部屋の壁を通して、夢のやうな世界の存在を岸本の心に暗示した。曾ては彼が記憶に上るばかりでなく、彼の全身にまで上つた多くの悲痛、厭惡、畏怖、艱難なる勞苦、及び戰慄——それらのものが皆燃えて、あだかも一面の焰のやうに眼前の壁の面を流れて來たかと疑はせた。」(註2)

ここで触れておきたいのは、藤村が渡仏する半年前に出版した『千曲川のスケッチ』のある一節である。この作品は明治23年から七年間滞在した信州小諸で綴つたスケッチを元にしたものであることはつとに知られている。(註3)「序」において藤村は次のように記す。

「『もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。』

これは私が都會の空氣の中から脱け出して、あの山國へ行つた時の心であつた。私は信州の百姓の中へ行つて種種なことを學んだ。田舎教師としての私は小諸義塾で町の商人や舊士族やそれから百姓の子弟を教えるのが勤めであつた

けれども、一方から言へば私は学校の小使からも生徒の父兄からも學んだ。到頭七年の長い月日をあの山の上で送った。私の心は詩から小説の形式を擇ぶやうに成った。斯の書の主なる土臺と成つたものは三四年ばかり地方に黙して居た時の印象である。」(註4)

『千曲川のスケッチ』は藤村自身が認めるように詩から散文に至る時代の産物で、小諸で出会った人々のエピソードを描いたものである。そして小諸滞在中に文壇の処女小説『舊主人』を言文一致体で発表するが、発売禁止となる。同じ頃『藁草履』も同様に言文一致で著わして発表する。到底、詩などでは表現し尽くされない人間の心を描写したのである。共に性にまつわる物語である。言わば人間のどろどろした部分である。若き藤村が「新鮮」さを求めたとは言え、『千曲川のスケッチ』の中で描写されている人間達を詩作の対象にすることは不可能であつたであろう。ただし、この『千曲川のスケッチ』の中では人々の生きる姿を外界からのみ捉えており、内面にまで至ってはいない。

結婚したばかりの藤村においてさえも、不幸な思いはあつた。後に自らをモデルにした小説『家』で描かれているように妻に関することであつた。常に妻に対して不信の念を抱いていた。『新生』の主人公岸本が、妻園子の死の間際に、不信の念を払拭したことは先に引用したとおりである。藤村の実生活にあつても事実であつただろう。

さて『千曲川のスケッチ』であるが、藤村の心情を直載に書き記している部分を先ず引用しておく。

「若い鷹は私の頭の上に舞つて居た。私はある草の生えた場所を選んで、土のほひなどを嗅ぎながら、そこに寝そべつた。水蒸氣を含んだ風が吹いて来ると、麥の穂と穂が擦れ合つて、私ささや語くやうな音をさせる。その間には、畠に出て『サク』を切つて居る百姓の鎌の音もする……耳を澄ますと、谷底の方へ落ちて行く細い水の響も傳はつて来る。その響の中に、私は流れる砂を想像して見た。しばらく私はその音を聞いて居た。しかし、私は野鼠のやうに、獨りで

左様長く草の中には居られない。乳色に曇りながら光る空なぞは、私の心を疲れあつさせた。自然は、私に取つてはどうしても長く熟視みめて居られないやうなものだ……どうかすると逃げて歸りたく成るやうなものだ。で、復た私は起き上つた。微温なまぬるい風が麥畠を渡つて来ると、私の髪の毛は額へ掩ひ冠さるやうに成つた。復た帽子を冠つて、歩き廻つた。」(註5)

季節は初夏である。『千曲川のスケッチ』が十年近く後に出版されているとは言え、散歩した事実に基づいていることは疑えない。『千曲川のスケッチ』の中で散歩した場面が描写されているのは、この章「麥畠」だけである。藤村がこのような散歩を好んでしたとは断言できないし、またその逆であるとも言ひ切れない。何故なら、散歩をして目のあたりにした描写があるスケッチが全て残されているのではないから。まして藤村はこの地で初夏を六回迎えている。こうした資料不足による不完全さを残しながらも、好んで散歩をしなかったことを前提として、「麥畠」の中で心情を吐露した原因に関する推論を試みたい。

小説『家』での主人公三吉はお雪と結婚した後、赴任した地に住む。時期は馬鈴薯のとれる初夏である。かつて親が認めた相手、許婚ではないが、勉に宛てたお雪の手紙を不図したことから三吉は読んでしまう。疑心暗鬼に捉われて、食事は喉を通らない。

「一夜眠らずに三吉は考へた。翌日に成つて見ると、お雪や勉とりかはが交換した言葉で眼に觸れた丈のものは暗記じて了つた程、彼の心は傷み易く成つて居た。家を出て、夕方にボンヤリ歸つて来た。」(註6)

散歩をした動機はまさしくこの点であろう。かくある心の状態にあって、信州浅間山の麓はどのように見えたか。『千曲川のスケッチ』にもあるように小諸は坂の町である。ひとたび集落を抜ければ千曲川は谷の方に見え、南西に八ヶ岳や蓼科山、佐久平が一望に見える。そして初夏の緑一色である。自然の雄大さが藤村を圧倒したに違いない。藤村の苦悶をよそに生の営みは大自然の中で

続けられる。自然は強いもの、あるいはよそよそしいものと写ったかは不明である。ただ言えることは、詩人としての藤村が自然を描写し得る対象とするにしても、自ら認めているように、対峙できないとしている点である。さらに「學生の家」と題したスケッチの一節に注目したい。

「私は盛んな青麥の香を嗅ぎながら出掛けて行つた。右にも左にも麥畠がある。風が吹来ると、緑の波のやうに動揺する。その間には、麥の穂の白く光るのが見える。斯ういふ田舎道を歩いて行きながら、深い谷底の方で起る蛙の聲を聞くと、妙に私は^お押しつけられるやうな心地に成る。可怖しい繁殖の聲。知らない不思議な生物の世界は、活氣づいた感覺を通して、時々私達の心へ傳はつて来る。」(註7)

自然の生の営みの一部である性の営みに思いを寄せて「可怖しい」とする藤村の心はどこにあるのか。リモージュの自然は信州小諸の自然とは違っていた。後者が苦悶する心に働きかけたのは、肉欲を連想させる生の営みの強調であった。だがリモージュのそれは、同じ生の営みとはいえ、生きる力を与えたのである。罪深き肉欲に恐れおののいてきた今、藤村の目に写るのは、「繁殖」などを連想させないリモージュの秋である。「桃や梨の樹の間を歩いて新しい果實の香氣を嗅ぎ廻つて」「成熟した樹木の生命を胸一ぱいに自分の身に受納れ」たのである。そして「失ひかけて居た生活の興味」を取り戻したのである。(註8)

1-3-(4)

パリという大都会よりも、地方にいる方が、自然のリズムの中で生活する人々の状況が鮮明に観察し得る。たとえば旅人としても、「葡萄の熟するからやがて酒に醸されるまで」(註9) 滞在すれば、否が応でも人々の生活を知ることが可能だ。リモージュに滞在する岸本が戦時下の状態であることを知るのには、出征兵士の噂を聞く時だけである。都市特有のめまぐるしさはあるはずもなく、自然の営みとそれに見合った人間達の日々の生活の営みのみである。木造の家屋以上に人々の生活

を堅固に守る様相を見せる石造りの家々、どちらかと言えば質素なフランス人の片田舎の人々の生活、そしてゆるやかな時の流れ思わせるこうした日々の生活の中に、ひとつのリズムとしての位置を占めているのがキリスト教である。例えば懺悔である。日頃の自ら犯した罪を悔い改めて教会の司祭に告白する。たとえ形式的なものになっているとしても、日常の習慣の中に取り込まれているのは、日本人の宗教に関わる生活の比ではない。教会は町や村の中心部にあり、その実からしても宗教は日々の生活の中心にあるとしても言い過ぎではない。

かつて洗礼を受けたことさえある藤村にはキリスト教の別な一面が見えたであろう。藤村もリモージュの地の人々のごとく、わずかな滞在の中で自らの習慣の中に取り込んだようである。小説『断生』の中にはリモージュでの教会のミサの場面の描写がある。しばらく藤村の導く教会の中に入ってみたい。

「丁度死者のための大きな彌撒が行はれて居るところであつた。ギエンヌの岸に添うて高く岡の上に立つその寺院は、ゴシック風の古い石の建築からして岸本の好ましく思ふところで、まるで樹と樹の枝を交叉した林の中へでも入つて行くやうな内部の構造まで彼には親しみのあるものと成つて居た。よく彼はそこへ腰掛けに來た。その日もあの亡くなつた老婦人の生涯を偲ぼうためばかりでなく、しばらくその静かな建築物の中で自分のたましひを預けて行くことを楽しみにした。あだかも樹蔭に身を休めて行かうとする長途の旅人のごとくに。……(略)……岸本は高い石の柱の側を選んで、知らない土地の人達と一緒に腰掛けた。古めかしく物錆びた堂の内へ響き渡る少年と大人の合唱の肉聲は巨大な風琴の樂音と一緒に成つて、嚴肅に聞えて來て居た。丁度暗い森の樹間を通して泄れる光のやうに、聖者の像を描いた高い彩硝子の窓が紺青、紫、紅、緑の色にその石の柱のところから明るく透けて見えて居た。」(註10)

そして思いは広がる。

「祭壇の方から香つて来る^{もつやく}没薬と乳香^{かろり}の薫は何時の間にか岸本の心を誘つた。彼は斯うした羅馬舊教の寺院の空氣の中に身を置いて見て、あの人間の醜惡を觀つくした末に修道院の方へ歩いて行つたばかりでなく終には僧侶に等しい十字架を負ふ人と成つたといふ極端な近代人の生涯を想像して見た。彼はまた、あの男色の關係すらあつたと言ひ傳へらるゝ友人との争闘より牢獄にまで下つた末にデカダンスの底から清淨な智慧の眼を見開いた名高い佛蘭西の詩人の生涯を想像して見た。」（註11）

「近代人」とはユイスマンスであり、「友人」とはランボー、「詩人」はヴェルレーヌである（註12）。岸本の思いはどこにあるかは推測できよう。ユイスマンスは19世紀の小市民階級の悲惨な生活を描き出し、人間嫌惡に墜ち入りながらも四十五点もの小説作品を残した。惡魔主義から一転してキリスト教におもむき、キリスト教藝術の産んだ最後の作家と評価されている。ヴェルレーヌは汚辱にまみれながらも、常に読む人の心を打つ芸術作品を残している。いずれも想像を絶する苦難を、前者はキリスト教、後者は芸術を手がかりとして乗り越えている。彼らに対する岸本、ひいては藤村の憧憬は我々に痛いほどに伝わってくる。もうしばらく教会内の雰囲気を知っておきたい。

「合唱の聲が止むと、大きな^{オルガン}風琴の響のみが天井の高い石の建築物の内部に溢れた。やがて白い法服を着けた年とつた僧侶が多勢の信徒を見下すやうな位置にある高い説教臺の上に立つた。戦時のツッサン^{たてもの}の祭に際會して死者を弔ふやうな説教^{それ}が夫から可成長く續いた。岸本の心は慷慨な口調を帯びた僧侶の説教の方へ行き、王冠の形した古めかしい説教臺の方へ行き、その説教臺と相對した位置にある耶穌の架像の方へ行つた。しかし彼は何時の間にかそんなことを忘れてしまった。彼は、赤い法服を着け金色の十字架を胸のあたりに掛けた二三の老僧や黒い法服を着けた十幾人かの中年の僧侶が祭壇の前に並んでいることも忘れ、白い冠りものを冠つた尼僧が教へ子らしい女性徒を引き連れて聴衆の中に混つて居ることも忘れ、つい側に腰掛けた

黒づくめの風俗の婦人達が説教に耳を傾けて居ることも忘れ、三本づゝ並んでとぼる長い蠟燭の火が祭壇のあたりをかゞやかして居ることも忘れてしまった。唯彼は石の柱の側に黙然と腰掛けて、假令僅^{たとへ}の間なりとも『永遠』といふものに對ひあつて居るやうな旅人らしい心持に歸つて行つた。」（註13）

日本の寺院が集落のはずれにあるのに比して、石造りの教会が集落の中心にあることは先に記した。人々の生活の場の中心部にあるにしても、別世界を創り出している。ひとたび教会内に入ると、外の世界の騒音はさえぎられ、日光はステンドグラスを経て、人工的ではあるが、神秘性に満ちた柔かな光となる。ミサの祈りを捧げる司祭の声やパイプオルガンの音色、合唱の声は石造りの天井や壁に反響して、音響的にも神秘性を増幅する。我々日本人には、このような教会の中に入ってもおよそ「死」のイメージは時として湧かないのが普通であろう。ただ言えるのは、キリスト教信者達が彼等自身の日々の生活からイエスの教えを切り離していないことである。そして時に応じて教会に訪れては祈りを捧げるのは、彼等が自らの罪を悔い改めて心の落ち着きを求めるためであろう。イエスの教えに基づいて、自らの過ちを悔い、隣人の罪深さについて許しを請う。別な言い方をすれば、自らのなした行為を自省し、自らを客観視しているのである。告悔室で司祭に告白することも同様である。つまり告白するにしても司祭に理解し得るように順序だてる。ことの整理である。そして第三者としての司祭がさらにことを整理しながら、問題点の指摘や解決策の方向を示す。豊かな日々を得るために、心の落ち着きを得る場所が約束されているのである。教会にはどれほど多くの人々が自らの悩みごとの解決のために、そして自らの罪深さを深く認識して悔いるために訪れたことであろう。いかに多くの人々が心の落ち着きを取りもどし、永遠の生命を得るために祈ったことであろう。石造りの教会は、神の家とされて、そのような人間達のどろどろしたもの全てを許しながらも、受け留めている。

岸本が『永遠』に向い合うのはまさしくこの点ではあるまいか。自らを省みて冷静になる余裕が

生じたのである。

しかし、これも束の間に過ぎない。岸本がパリに戻ると姪からの手紙が来る。やはり愛の告白である。

「あれほど自分が送った手紙も叔父さんの心を動かすには足りなかつたのかと書いてよこした。叔父さんのことを思ひ、自分の子供のことを思ふ度に、枕の濡れない晩は無いと書いてよこした。そんなに叔父さんは沈黙を守つて居て、この自分を可哀さうだと思つては呉れないのかと書いてよこした。」(註14)

岸本は自らの気持を思い、答えない。

「名状しがたい心持が岸本の胸中を往來した。日頃一種の悔蔑をもつて女性に對して來たほど多くの失望に失望を重ねた自分の心持がそこへ引出された。姪を憐れみ、姪を恐れることはあつても、決して彼女の想像するやうなものでは無かつた自分の心持がそこへ引出された。節子のことを考へる度に、きまりで思出すのは義雄兄の言葉であつて、『お前はもうこの事を忘れてしまへ』と言つて呉れたあの兄に對して來た自分の心持もそこへ引出された。この岸本の堅く閉した心の扉の外に來て自分を呼びつづけて居たやうな姪の最後の聲を聞く氣がした。根氣も力も盡き果てたかと思はれるやうにその扉を叩いた最後の精一ばいの音を聞きつけたやうな氣がした。」(註15)

節子の氣持を無視するのである。アベラールとエロイズのごとき氣持にはならない。手紙を燃やし、「折角リモオジュの田舎の方で回復した新しい旅の心に掩ひ冠さつて來た」(註16)ことを自覚するのみであつた。苦惱は新しい展開を見せる。かつては自らの罪意識に翻弄されて、節子の氣持をはかるゆとりさえなかつた。だが今では、もちろん罪意識による悩みはあり、節子の愛を明確に認識するが、答えようとしなない。

1-3-(5)

朝日新聞にパリ便りを載せていた藤村は大正4年(1915)2月24日から27日にかけて『ある友に』と題して一文をなす。これが書かれたのは前年の12月22日から27日にかけてである。シャルル・モーラスに触れながら、自らの生を省みる一文である。シャルル・モーラスの執筆する「アクシオン・フランセーズ」紙を偶然手に入れ、語学の稽古のかたわら毎日購読することにしたのもモーラスに興味を覚えたからであつた。(註17)

「レオン・ドオデエ(君の熟知せらるゝ小説家の子)が主筆で、モオラスは『政治』とした一括した特別の欄に毎日寄稿して居ます。そのベルグソンの態度を駁し、モオリス・バレスを評し、クレマンソーを評し、戦時に於ける『サンデカリスト』の行動にまで言及する熱意と精力とには心を引かれます。私はモオラスのことが頻りと知りたくなりました。」(註18)

さらに「今迄、誰からも聞いたことの無い聲をあの人から聞くやうな氣」にもなり、「政治といふものの考へ方を變へさせられるやうな氣」にもなつた。(註19)「ある特別な使命をその時代に^{もたら}した」情熱の持主であり、「普通の意味の政治家でなくて反て政治家を開發せしめ、普通の意味の文学者でなくて反て文學者を開發せし」(註20)める人と藤村がするモオラスとはどんな人間か。

第一次大戦下にあつてのフランスは、普仏戦争以来ドイツに対する憎しみがあつた。これを背景に論調を展開したのがアクシオン・フランセーズ紙である。(註21)藤村が伝えるように、この日刊紙の紙上でフランスの危機を訴え、その優越性を唱えたのがシャルル・モーラスである。(註22)モーラスは若くしてギリシャ・ローマの古代文化に親しみ、伝統を重んじ、実証主義に徹した。従つて曖昧なる無秩序を排し、神を信じないが教会は社会と人間の心の秩序の基となるから守るべきものとし、王制が最も確かな体制であるとした。それ故、個人主義が導く民主主義、アナキーな精神が導くロマンチズムは無秩序であるがために否定した。こうした考への上にドレフェス事件に関わり、フランスの秩序を重んじた論調をアクス

ィオン・フランセーズ紙に展開したのである。
これは当時の若者達に受け入れられた。(註23)

藤村自身もこれに触発されたのである。ただし、政治的かつ思想的に目覚めるという点ではなく、自らのこれまでの生活を違った側面から、つまり社会との関わり合いという点で。そして社会と関わった肉親、父親に思いを寄せる。『新生』では藤村はこの経緯を書き連ねる。百十三章から「斯の佗しい冬籠りの中で、岸本の心はよく自分の父親の方へ歸つて行つた」と書き記し、百十九章まで岸本の父親のことを回想させる。(註24)「岸本の心は未だ曾て行つたことの無いほど近く父の方へ行くやうに」(註25)なり、「彼の旅も、これから、先の方針を定めねばならない」(註26)とした。岸本は父親と日々を共にしたのは九歳までで、十三歳の時に東京で父の死を聞いた。従って父のことは良く理解していなかった。父の狂い死の理由も考えてみる。合わせて父のとった行動も考える。

「父が生前極力排斥し、敵視した異端邪宗の教の國に来て、反つて岸本は父を視る眼をさへ養はれた。自分の國の方に居た頃の彼は、平田派の學説に心を傾けた父等の人達があの契沖や眞淵のやうな先驅者達の歩いた道に満足しないで、神道にまで突きつめて行つたことを寧ろ父等のために惜んだ。今になつて彼は古典の精神をもつて終始した父等が當時の愛國運動に参加したことや、學問から實行に移つたことを可成重く考へて見るやうに成つた。」(註27)

自らを省みる作業は父親をも見るにまで至った。
そして父親に対する見方も変わる。

「恐い、頑固な、窮屈な父は、矢張自分等と同じやうな弱い人間の一人として、以前にまさる親しみをもつて彼の眼に映るやうに成つた。」
(註28)

こうした父親と自らを比較したらどうなるか。
たとえ父親が精神病で苦しむにしても、その大きな要因として社会との関わり合いが故であった。しかし、旅人に過ぎない岸本はフランスもしくは日本の社会とは没交渉の状態である。そして姪とのこ

とで苦悶し、まさに自分の弱さに直面していたのである。まして戦時下である。そもそも國に帰ることを、初めから断念していたのであるが、戦時下という情勢によりそれも覺つかない。残してきた子供達のことを思い、フランスに滞在すること、ひいては生きることさえも無意味に思えてきた。

「彼は、あだかも冷たく嚴かな運命の前に首を垂れる人のやうにして、斯うした一生の岐路に立たせられるよりは寧ろ與へられた生命を返したいとまで嘆いた。彼は亡き父の前に自分を持つて行つて、『この生命を取つて下さい』とも祈つた。」
(註29)

だがこれは本来の思いではない。むしろ自問をするのである。

「——旅人よ。お前はこの國を見ようとしてあの星の光る東の方から遙々とやつて來たのか。この國にあるものもお前の心を満すには足りないのか。」(註30)

フランスを、パリを新たに見廻すと、街は帰還兵士で満ちている。彼等の生きていることを、死を考えた自らと比べる。

「眼の下に動く兵卒等の軍帽を包んだ紺の布や、防寒用の新服はいつでも酷く汚れて、風雪の勞苦が思ひやられた。

『生きたいと思はないものは無い——』
と彼は自分に言つて見た。」
(註31)

さらに見つめる眼はフランスの社会事象にも及ぶ。具体的には春の息吹を見せるパリの風景を描きはするが、社会情勢は描かれない。

「彼は旅人らしく自分の周圍を見廻すと、来るべき時代のためにせつせつ準備して居るやうなもののあるのに氣がついた。彼の眼には、どう見てもそれは芽だ。間斷なく怠りなく支度して居るやうな芽だ。それは可成もう長いこと萌しに萌して來たものであると言へる。けれども何人の骨髓にまでも浸み渡るやうな歐羅巴の寒い

戦争が来て、一層その發芽力を刺激されたやうにも見える。左様したものが彼の周圍にあった。そしてその芽の一つとして、曾て一度は退廢したものの再生でないものは無かつた。…（略）

その芽が岸本にさゝやいた。

「お前も支度したら可いではないか。澱^{よど}み果てた生活の底から身を起して來たといふお前自身をそのまゝ新しいものに更へたら可いではないか。お前の倦怠をも、お前の疲労をも——出來ることならお前の胸の底に隠し有つ苦惱そのまでも。」」（註32）

「芽」、それは人間の意志である。たとえ戦争状態にあらうとも時は移り、人間は生き続ける。精神の荒廃があるにしても、それに抗らうのが人間である。

藤村はパリ通信「春を待ちつゝ」（註33）の中でも、この「芽」に触れている。

「私は今自分の周圍を見廻すと、戦後の佛蘭西の為に——來るべき時代の為に——せつせと準備しつゝあるものに氣がつく。どう見てもそれは芽だ。」（註34）

この文の後にモーリス・バレス（註35）のことに触れた後、次のように締めくくる。

「自分の感ずる時代の綜合力は斯のバレスの言葉^{ことば}をすら手温しとして居るやうに見える。戦後には果して何が來るか。何が生まれるか。斯の今からせつせと準備しつゝあるものに自分は注意を怠るまい。」（註36）

第一次大戦が始まって未だ一年に満たないうちに藤村はこれを書き記している。「時代の綜合力」と藤村がするものは何か。時代に立ち会った藤村が見たものは何か。第一次大戦末期に出現したダダイスムか、あるいはそれを引き継いだシュールレアリスムの萌芽をすでに見ていたのか。またブルーストの『失われた時を求めて（第一部）』の完成を知ったことか。反ドイツ・愛国主義者の戦争賛成論か、あるいはロマン・ロランの戦争反対論か。1916年のアンリ・バルビュスの『砲火』を

生む素地は、大戦中に生じた反戦、厭戦思想に他ならないが、この前ぶれを見定めたのか。だが藤村の帰国後にこの運動は顕著になった。（註37）

いずれにせよ藤村の予見は、戦後において新たなものが出現したと言う点で的中する。社会を見つめる眼を獲得したがために、可能となったに違いない。そして歴史に深い興味を覚えたことも記している。（註38）

「私の叔父、私の兄、其他私の身の邊^{まわり}にあつた人達は皆な彼様いふ空氣の中で活動を思ふ頃でしたから種々な政治雑誌は私の手の届き易い所に有りました。私は人に隠れてまでそれに読み耽つたことを覚えて居ます。自然と私の志したことも矢張^{やはり}左様いふ方向でした。私は十七八歳の頃まで未來の政治的生涯を夢みて居ました。

それから二十五年ばかりの間、何といふ違つた世界に私の小さな生涯が開けて行つたでせう。私は歩めば歩むほど政治といふものから遠ざかるばかりでした。……（略）……唯今私なぞは政治といふやうなものから自分の心は煩はされまいとして今日まで歩いて來ました。」（註39）

繰り返しになるが、藤村は視野を広げたのである。この『ある友に』は四回に渡って寄稿したのであるが、その最終回の冒頭でさらに告白が続ける。

「私は自分の國に起りつゝある實際的生活の活動に興味を失つたと君に申し上げました。一筋に細い道を辿つて來た私は唯々自分の心を煩はされまいとしたのであつて、十年二十年の昔も今日も政治といふものの考へ方なぞは殆ど同じやうな固定した通俗的なものに過ぎなかったことを君に白状しなければ成りません。恐らく世には私と同じやうな通俗な見解から、政治は政治、哲學は哲學、藝術は藝術といふやうな状態^{ゐなわ}に甘んずる人もあるでせう。しかし吾儕に斯様な見解を抱かせたものは一つや二つでは無いことも君に申し上げねば成りません。」（註40）

そして藤村は結論づける。

「^{われわれ}吾儕は政治的にも生れ^{かは}更らなければ成らない。是はシャアル・モオラスを知るやうに成つてから、最初に私の受けた印象です。

モオラスに就いては、もつと君に御話したいと思ひますが、こゝには僅な印象にとゞめます。傍觀者として死んだフロオベールなぞの時代から、直接の行動にまで突きつめて行つたモオラスのやうな人の出て來たまでの経路を考へるといふことも樂みです。あのユイスマンスなぞが宗教に行かうとした程の情熱を、すぐれた創作であつても容易には心を満たして呉れないやうなものを、反てモオラスの政事論の中に見つけるといふことも樂みです。」 註41)

このモオラスの件については『新生』では触れていない。しかし、先に引用した百十三章で父親のことを考える岸本を藤村が描くのは、モオラスに限らず戦時下のフランスを見たことで触発されたがためであると言えよう。

大正4年から5年にかけての一冬は、罪意識におののいた姿は消える。むしろ積極的に社会に関わることに思いを寄せ、数奇な運命の果てに死んだ父親の姿を追い求め、その延長線上で歴史に関わる出来事に遭遇する。そして戦時下という厳しい状況にありながらも、したたかに生きる人間を見る。

『新生』の世界に戻ろう。岸本はかくして自らの半生を再度振り返る。自らを突き放して見つめる。結婚まで決意した若き岸本が、勝子と別れて以来、持ち得ていなかったものは信頼であり、男女間の煩わしさが故に生じた不信である。それ故に妻、お雪のことも苦い体験となった。

「信の無い心——それが彼の堕ちて行つた深い深い淵であつた。失望に失望を重ねた結果であつた。そこから孤獨も生れた。退屈も生れた。女といふものの考え方なぞも實にそこから壊れて來た。

旅に來て、彼は姪からかずかずの手紙を受取つた。いかに節子が彼女の小さな胸に展げて見せるやうな言葉を書いてよこさうとも、彼にはそれを信ずる心を持てなかつた。」(註42)

アベラールとエロイズの寝像から見たものは「深い恍惚の世界の象徴」であり、「想像も及ばぬ男女の信頼の姿」であつた。(註43)

「まるでお伽話だ、と彼は眼に浮ぶ二人の情人のことを言つて見た。しかしお伽話の無い生活ほど、寂しい生活は無い。彼は最早自分の情熱を寄すべき人にも逢はず仕舞に、この世を歩いて行く旅人であらうかと自分の身を思つて見た。左様考へた時は寂しかつた。」(註44)

人間と人間の間に絶對的に信頼が失われた状態の行きつく先は戦争であると言っても過言ではあるまい。この国家と国家の闘いの中で藤村が知り得たのは、信頼の喪失という自らの心の状態である。今やそれを取り戻すためにも生き続けねばならない。信頼を失うきっかけとなった勝子との出会い以前に戻る必要があつた。

「『左様だ。何よりも先ず自分は幼い心に立ち歸らねば成らない。』」(註45)

岸本は日本に居る子供達に会うことを思い、そして節子に再会することを思つて深い溜息をつきはするが、帰国の決意を固める。「死の中から持來す回生の力」(註46)をたずさえて。

先に本論の冒頭で触れた「澁み」とは、信頼を失つた状態に他ならない。『新生』の序で藤村の記す「原因の無い憂鬱」、「死んだ沈黙」も同様である。自己の存在場所、存在価値、つまり存在証明を見失っている状態である。これを獲得するためにフランスに來たことは無駄ではなかつた。

藤村は「春を待ちつゝ」の中で、パリを訪れたストリンドベリイやツルゲーネフ、トルストイの中に、そしてドフトエフスキイの中にフランス文化や作家達の影響があるとしている。(註47)芸術のみならず、あらゆる面で、訪れ、滞在する人を育むフランス、そしてパリ。とりわけ藤村にとっては視点の回転とも言うべきであろうか。個人的な部分で自らの生涯にこだわることも、父のごとく社会との関わりの中で自分の人生にこだわる視点を得たとは言えまいか。まさしく『新生』に他ならない。(以下次号)

註

- 1) 『藤村全集第七巻』 筑摩書房、昭和53年、P. 192 (以下『新生』に関する引用はすべてこの書をテキストとし、ページを記すのみにとどめる。)
- 2) P. 193
- 3) 藤村自身のことばによって、この作品の成立過程は『千曲川のスケッチ』の奥書で語られている。『千曲川のスケッチ』の初出は、雑誌「中学世界」(博文館)で明治44年6月から大正8年にかけて12回にわたって連載された。ただし「序」は大正元年12月20日付発行の単行本(佐久良書房)に附されたものである。
- 4) 『藤村全集第五巻』 筑摩書房、昭和53年、P. 3~4
- 5) 同書、P. 20
- 6) 『藤村全集第四巻』 筑摩書房、昭和53年、P. 78
- 7) 『藤村全集第五巻』 筑摩書房、昭和53年、P. 8
- 8) P. 187
- 9) P. 197
- 10) P. 195
- 11) P. 195~196
- 12) ユイスマンズ Joris-Karl Huysmans、本名 Georges Charles (1848-1907)。処女作『マルト Marthe』でエミール・ゾラに認められ、自然主義的立場を堅持しながら、三部作『出発 En route (1895)』『カテドラルCathédrale(1898)』『修練者 Oblate(1903)』がある。
ランボー Jean-Nicolas-Arthur-Rimbaud (1854-1891)。彼を天才詩人として発見したヴェルレーヌとの関係は余りに有名である。詩作品は16歳から20歳(1854-1891)頃までの間に書かれ、以後は文学とは無縁の生活をする。『イリュミナスイオン Les Illuminations』『地獄の季節 Une Saison en Enfer』がある。
ヴェルレーヌ Paul Verlaine (1844-1896)。マラルメと共に高踏派詩人として出発するが、象徴派の詩人として落ち着く。ランボーとの生活は破綻したが詩人としての成長にはこの出会いは不可欠であった。出会い以前の作品には『サチュルニアン詩集 Poemes Saturniens (1866)』『艶なる宴 Fêtes galantes (1869)』があるが、以後の作品『言葉なき恋歌 Romances sans Paroles (1874)』『叡知 Sagesse (1881)』に象徴派詩人として大きく成長

したのがうかがわれる。

- 13) P. 196
- 14) P. 205
- 15) P. 205~206
- 16) P. 209
- 17) 例えば、藤村が目にしたと思われる記事である。
1914年12月27日と28日の二回に分けて書かれた「防衛と国家の改革のために」では、国家の危機に直面して、アクスイオン・フランセーズ紙に送られた種々の階層の人々の手紙を紹介しながらアクスイオン・フランセーズの役割と支援を訴えている。モーラスの論調はアジテーション的な要素はうすく、控えめである。むしろ熱ばさは投書を寄せた人々にまかせている。
- 18) 『藤村全集第六巻』 筑摩書房、昭和53年 P. 379~380
- 19) 同書 P. 381~382
- 20) 同書 P. 382
- 21) 1908年に創刊された極右の日刊紙。ドレフュス事件の時に国家主義者や反ドレフュス派によって創設された「フランス行動委員会 Comité d' action française」がフランス行動連盟 Ligue d' action française (1905年に発足)となり、レオン・ドデーやモーラスの下で発行されるようになった。第二次大戦中はドイツを許容したヴィシー政府を支持するが、戦後1944年には発行禁止にされた。
- 22) モーラス Charles Maurras (1868-1952)。第一次大戦後にはアカデミー・フランセーズの会員となり、ムッソリーニやフランコ、ペタンを支持する。第二次大戦後は、共和国の裏切り者としてアカデミー会員を剥奪され、禁固刑となる。批評家としての作品に『知性の将来 L'avenir de l'intelligence (1905)』がある。
ドレフュス事件は1894年10月ユダヤ人出身のアルフレッド・ドレフュス Alfred Dreyfus (1859-1935)がドイツのスパイとして逮捕されたことがきっかけである。作家エー・ル・ゾラはドレフュスの無実を主張した。モーラスはこの主張に屈することは、国家の秩序と調和が崩れるとして逆の立場に立った。事実、ドレフュスは無実となったが、12年後のことであり、その間左右の対決や軍の面子にこだわった二度の有罪判決があり、国政に大きな影響を与えた。またゾラやモーラスばかりでなく、当時の

文学者達にも影響を与えた。

- 23) P.-H. シモン (Pierre - Henri Simon, 1902 - 1972)の著わした『現代フランス文学史』では次のように記されている。

「おどろくべきことはこれほど矛盾にみちた種々な主張もモーラスの理論体系がフランス思想の重要な部分に直接的な勝利を占めることのさまたげにはならなかったことである。大学程度の諸学校の青少年たちがすぐに心を動かされた——1912年のアガトンのアンケートがそれを証し立てている。——ついで影響は大学の内外にまで及んだ。その証拠として、ビュール・ラッセールが、最も非難的とはなったが、1909年にローマン主義に関して、というよりもむしろ、ローマン主義に反対して、書いた論文や、『アクション・フランセーズ』に宗旨替えをしたジュール・ルメートルの晩年の著書に見られる反響など、がある。」平井啓之訳『現代フランス文学史』紀伊国屋書店、1960年 P. 74

- 24) 百三十三章はP. 210、百十九章はP. 219

25) P. 220

26) P. 221

27) P. 226

28) P. 220

29) P. 222

30) P. 222 ~ 223

31) P. 223 ~ 224

32) P. 224 ~ 225

- 33) 大正4年3月8日から30日までの間に書かれ、4月24日から5月21日にかけて11回にわたって朝日新聞に掲載された。

- 34) 『藤村全集第六巻』筑摩書房、昭和53年 P. 390

- 35) Maurice Barrés (1862-1923)、初期作品の『自我礼拝』などでは極端な自我確立を求めているが、「土地と死者」(祖国と祖先)から切り離されて自我は存在し得ないとし、個人主義から愛国主義、伝統主義に転じた。反ドレフュス派でもある。

- 36) 『藤村全集第六巻』筑摩書房、昭和53年 P. 390~391

- 37) ダダイスムの出現は1916年2月チューリッヒでトリスタン・ツァラによって起こされ、1918年頃フランスにもたらされた。1920年頃からアンドレ・ブルトンらによってシュールレアリスムとなった。これ

より先にアポリネールは1913年に詩集『アルコール Alcool』を発表していた。その傾向はランボーを受け継ぎながらもダダイスムやシュールレアリスムの先駆けをなしていた。

ブルーストの『失われた時を求めて』の第一部『スワン家の方へ』の完成発表は1913年である。

反ドイツ・愛国主義による戦争賛成論は多くの国民の支持するところとなっていた。1914年8月議会で、党派を超えて全フランスが一致団結すべく神聖連合が採択された。戦前は第二インターナショナルに所属し、終始反戦を唱えていた社会党は態度を一変させ、労働総同盟も同様の姿勢をとった。文学者たちも同様に愛国者となった。藤村が朝日新聞(大正4年7月17日付)に『詩人ペギイの戦死』の中でも報告しているが、戦死した文士は45名になっていた。

ロマン・ロランは戦争が起きると戦争反対を唱え、スイスに移住し、『戦乱を超えて』を発表して、平和主義を主張した。労働者達による戦争反対のストライキ参加者は1914年には1万人、翌年には4万人、1917年には30万人にもなった。

厭戦思想は戦争の科学化により、これまでとは違った戦闘形態が出現したためである。つまり非戦闘員までも捲込んだからである。1915年4月25日ドイツ軍による毒ガスの使用、1916年9月英国軍の航空機による戦闘、空襲があげられる。また戦争の長期化もこの考えを助長したと言える。

- 38) 『ある友に』の四章目で歴史への興味を語っている。

「もし吾國に於ける十九世紀とも言ふべきものを書いて呉れる人があつたら、奈何に自分はそれを読むのを樂むだらう。……」(『藤村全集第六巻』筑摩書房、昭和53年、P. 391)

- 39) 『藤村全集第六巻』筑摩書房、昭和53年 P. 382 ~ 383

40) 同上、P. 383

41) 同上、P. 384

42) P. 233

43) P. 234

44) 同上

45) 同上

46) P. 238

- 47) 『藤村全集第六巻』筑摩書房、昭和53年 P. 393~395